

# 「コミュニケーションコラム」の活用

日々、子どもたちを教える先生方が抱えるお悩みの中から一つを取り上げ、解決のためのアドバイスを掲載するコーナーです。  
今回は、達富洋二先生と吉永幸司先生にご登場いただきます。

お悩み

教科書三年以上の各学年にある「コミュニケーションコラム」の生かし方を教えてください。「話すこと・聞くこと」教材との関連のさせ方、授業での配慮をどのように行えばよいのでしょうか。



「コミュニケーションの力と」話すこと・聞くこと」の学習にはどのような関係があり、「コミュニケーションコラム」の意義をどのように考えればよいのでしょうか。

解決のために

1 自分の経験を想起・自覚し、  
「コミュニケーション」の予想と心積もりができるようになります。



佐賀大学教授  
達富洋二

## 「話す・聞く」学習と一体化して

「コミュニケーションの力は、「話す・聞く」単元の学習と一体化して育んでいくことが大切です。なぜなら、その育成には、次の三つの力が必要であり、これらは、「話す・聞く」学習を通して、より着実に身につくものと考えられるからです。

- ① 語彙や音声などの言語的な力
- ② ひとまとまりの話(話し合い・談話・討議など)を、相手と一緒につくりあげるための文脈的な力
- ③ 自分の考えをもって「コミュニケーション」の場面に関与していきこうと主体化する力

ただ、身につけた力を実際の場で運用し、うまく働くかどうか確かめ、セージ加減を知ること也很重要です。そのため、力の定着のためには、実際の「コミュニケーション」の場面で働かせてみる必要があります。

## 実際の場での「コミュニケーション」

しかし、実際の場では、「コミュニケーション」がうまく成り立たないこともあはるはず。日常の「コミュニケーション」というのは、やり取りする内容の一部始終をあらかじめ把握してから始めるものではなく、相手とのやり取りを通してつくりあげていくものです。ですから、その参加者は、「コミュニケーション」を取りながら、やり取りしている内容がこの先どうなっていくかを予想する必要があります。

やり取りの内容がそれぞれ異なる実際の場では、それまでの自分の経験を想起することが求められます。過去の「コミュニケーション」の場面の状況から、自分の関わり方が、判断の手助けとなるからです。そのため、「コミュニケーション」に関する経験、自分の参加のしかたを、折に触れ自覚しておくことが重要といえます。

## 「心積もり」を可能にする「コラム」

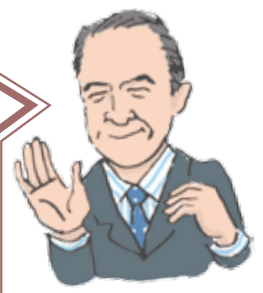
「コミュニケーション」は、人間関係を構築し、切りひらいていくものです。上達には、「心地よさをつくる」という心積もりができるようになることもまた有効です。「コミュニケーション」の型を知り、それを使いこなして自分のものにすることで、その心積もりが可能になります。

そこで、活用したいのが「コミュニケーションコラム」です。紙面から具体的な「コミュニケーション」の場面を想像することで、自分の経験を想起し、自覚させるのに適した教材といえます。とりわけ中学生では、挿絵と吹き出しが効果的に用いられ、より場面の状況が想像しやすくなっています。  
本コラムはまた、教室での心地よい関係づくりにも働くはず。「話す・聞く」学習や実際の場と行き来しながら、「コミュニケーションコラム」を有効に活用していきたいものです。

## 達富洋二

京都市生まれ。長崎県五島列島の公立小学校教諭、大阪教育大学附属小学校教諭、京都教育大学附属小中学校教諭を経て、現職。博士(文学)。共著書に、「国語授業の新常識」「読むこと」「シリーズ、国語教育の新常識」これだけは教えない国語①②(ともに明治図書)など。

実際に授業を行ううえで配慮・意識しておきたいことについて挙げていただきます。



京都女子大学教授  
吉永幸司

解決のために

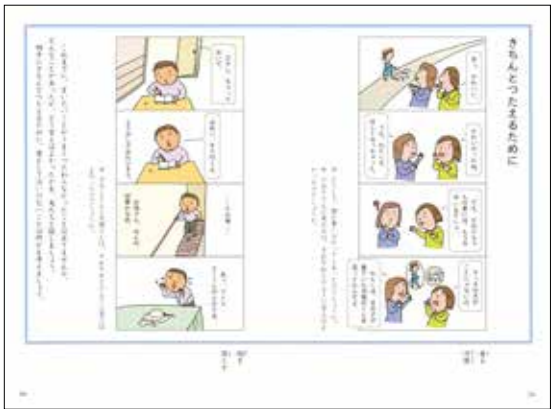
2 「コラムの内容を理解したら、日記を書くなどして、学習と生活をつなげるようにしていきましょう。」

「国語が大事」と思う子に

子どもたちが、「国語で勉強したことが役に立った」「国語で勉強したから成長できた」という気持ちをもち、国語を好きになってくれたらと思っています。そのために重要なのは、授業が楽しく分かりやすいこと、そして習得した力が日常の言語生活の向上に役立っているという手応えを子どもたちに感じさせることです。「コミュニケーションコラム」はこの二つの要件を満たしているといえます。「きちんとつたえるために」(三年上)を例に考えてみましょう。

「コミュニケーションコラム」の意図

「きちんとつたえるために」は、見開き二ページ、漫画の形式で構成された親しみやすいコラムです。日常生活で誰もが経験するような、言葉による誤解や行き違いに気づかせ、正しい使い方を習得させることを意図したものです。よい教材であるのに、息抜きとして軽く読んで終わるといふ扱われ方も多いような気がします。しかし、学習の出口を「言語生活の向上」に置くと、言語に対する子どもたちの意識が変わる力をもった教材です。ここではその力を引き出すべく、取り立てて扱った授業例をご紹介します。



「きちんとつたえるために」(3年上P34・35)

授業の展開例

(1) 教師が事例を集める。

日常生活で言葉の食い違いや言い間違いがうまく伝わらなかった事例を集めます。「明日、公園で遊ぼう」と約束をしたが、時間を決めなかったので困った、「大事な本だからすぐに返してね」と言ったのに、なかなか返してもらえなかったなど、さまざまなのが考えられます。

(2) コラムを活用して授業をする。

▼導入  
(1)の事例を使って、「困ったこと」のクイズをし、きちんと伝えるための学習への関心を高めます。例えば、公園で相手を待って困っている子の絵を見せ、その理由を考えさせるといった方法が挙げられます。

▼展開  
教科書の事例を見て、状況やその原因について考えます。ここでは、グルー

プで話し合い、きちんと伝えることの大事さを確かめることが重要です。場面を演じることで、内容を理解するという方法も考えられるでしょう。これらの学習活動を通し、コラムの意図である、①どう言えばよかったか、②相手にきちんと伝えるために落としてはいけないことを理解させるのです。

▼終末  
「( ) をはっきり伝える」という形で学習内容を整理します。( ) 内に入る言葉として、主語・場所や時間・伝えたいことなどが考えられます。

(3) 日記を書く。

学習したことを授業で完結させず、自分の生活づくりにつなげるため、一週間、「きちんと伝える」を題材とした日記を書かせます。条件として、きちんと伝えることを意識した出来事を書くことにします。日常では、うまくいくことだけでなく、トラブルも起るはず。それを、きちんと伝える

ことを意識させる好機とし、どのようにすればよかったか考える過程・考えたことを日記に書かせるのです。三年生はこうしたトラブルが多い時期です。題材に困ることはないでしょう。

この時期の子どもたちの集中力を鑑みると、「きちんと伝える」という意識を高めるには、一週間という期間が適切だと考えられます。一週間、集中して考えることで、その後も「きちんと伝えていきますか」という言い言葉が通じる子どももクラスに育っていきます。さらに、「国語で勉強したから成長できたね」と言葉をかけ、国語の学習が生活に役立っているという自覚を促すのもよいでしょう。

「コミュニケーションコラム」は、二ページの手軽な構成に見えますが、奥が深い教材といえます。子どもたちが、自分の言語生活を見つめることに資するような、授業での活用を考えていきたいものです。



吉永幸司

滋賀県生まれ。滋賀大学教育学部附属小学校教諭、同副校長、公立小学校校長を経て、現職。京都女子大学附属小学校校長。著書「日本語の力がのびることはあそび」(ポプラ社)、「子どもが育つ学校現場の京大式はめ言葉」(小学館)など。光村図書 小学校「国語」教科書編集委員を務める。

「その悩み、解決します！」は今号が最終回となります。「愛読ありがとうございます」